



利根山光人

Toneyama Kojin

第83号 平成26年7月31日

記念美術館通信

Memorial Art Museum News Letter

〒024-0043 岩手県北上市立花15-153-2

TEL/FAX 0197-65-1808



終わらない会話



降臨

(第2回利根山光人記念大賞展ビエンナーレ・きたかみ大賞作品)

菊地 仁美 (昭和38年～) は奥州市出身で、武蔵野美術大学を昭和62年に卒業後、県内の公立中学校教諭となり、現在は北上市立北上中学校の美術教諭として勤務。平成9年に岩手県芸術祭洋画部門芸術祭賞、平成16年には利根山光人記念大賞展ビエンナーレ・きたかみ大賞を受賞。

今回は大賞受賞後10年間の制作活動の成果を中心に、菊地仁美本人が選んだ作品を展示します。利根山光人の土俗的精神性との共通項を再発見し、今後の活動に意味が与えられたような実感があると語る氏の作品群を、どうぞご鑑賞ください。

平成26年度企画展
菊地仁美展
— 回帰して耳を澄ます —
会期…8月30日(土)～11月30日(日)



— 昨年のみちのく芸能まつり

〈画伯との思い出〉

祖父の没後も、北上の記念館や記念絵画大賞展を通じて知り合った皆様の繋がりに、祖父の様々なエピソードを教えてもらった。祖父が北上の文化を少しでも多くの人に見てもらおうとメキシコ人を連れていった話を聞き、私も一昨年は友人のスイス人とパラグアイ人を連れて8月のみちのく芸能まつりに参加した。市民の方々の温かい歓迎を受け、伝統文化を堪能し、世界に胸を張って誇れる祭りだと感じた。これからも、祖父のように北上の文化を世界に知ってもらえるような活動をしていきたい。

〈好きな画伯の作品〉

「北上駅陶壁画」

祖父のでかい壁画が好きだ。中でも、北上の壁画は迫力がある。祭りの躍動感が伝わってくる。動かすことの出来ない壁画はその土地に根付いた絵でなければならない。その土地・文化を良く知り、愛さなければ描けないし、見る人もそうでなければ理解してもらえない。そんな壁画に挑戦した祖父の北上に対する想いと、その挑戦を受け入れてくれた北上市の熱い絆があつた壁画から感じられる。



北上駅陶壁画

尾崎健人さん (利根山光人の孫)

画伯の名前の「人」の字をもらい、現在は、画伯のように世界を飛び回り、途上国開発の現場で開発コンサルタントとして働く。

「遺したい北上の風景画」



本石町通り

昭和27年9月20日、私はある歯科手伝いに就職しました。我が家からは1キロほどあるので歩いて約15分位。家事を済ませてからの出勤なので近道、近道のコースを選んで行くことになり、必ず本石町を通るのです。あの大きな櫓の横を朝はおはよう、秋には寒くなってきたねとか、春は元気に緑をいっぱいつけたねと心の中で声をかけて歩いたものです。懐かしい思い出の道、下手でも楽しく描かせてもらいました。

木村 吉子さん
(利根山光人記念美術館光の会)

—「遺したい北上の風景画」募集—

応募希望の方は、北上市まちづくり部生涯学習文化課 (0197-72-8304) までお問合せください。

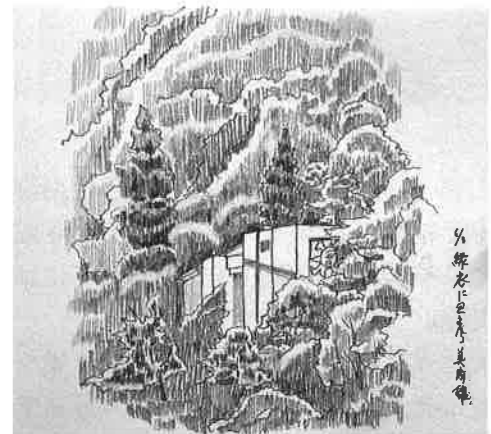
「美術館の楽しさ」 その2

美術館は急斜面の雑木林を切り拓いて建てられている。生活するには不便な地である。

風の強い日には木々の間を風が唸り声を発して吹き抜けて行く。メキシコの密林を想い、どこか似た原始の雰囲気を感じこの地に魅せられたのだろうか。美術館には200号の大作『原始76』という絵が展示されている。

玄関前に立つと、奥羽山脈を背に雄大な風景の中に、展勝地が一望できる。展勝地の開園と利根山氏の誕生が1921年で一致する。利根山氏も眺めたであろう景色を愛でていると、氏がそっと側に居るような感じがする。そんな美術館です。

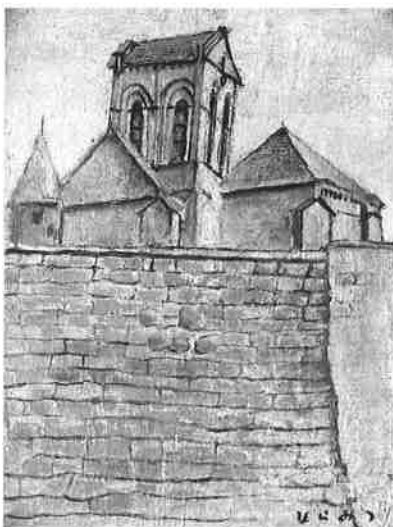
高木 俊士
(利根山光人記念美術館専任研究員)



緑衣に包まれる美術館

＝美術館・展示会巡り＝ 番外編

パリ旅行の思い出 オーヴェール・シュル・オワーズ



ノートルダム教会
高橋平光 画

一昨年の12月、妻が「フランスに行く」と言ってきた。どうも結婚した頃、私がフランスのバルビゾンに行ってみたくと話していたらしく、幸か不幸かわからないが、急に12月31日にフランスに出発した。

パリから有名なモン・サン・ミシェルに向かう途中、ゴッホが住んでいたオーヴェール・シュル・オワーズに立ち寄った。観光ガイドの案内で、ゴッホが住んでいたカフェ兼下宿屋を見て、次にノートルダム教会へ。すると、小学生か中学生の頃か忘れたが、ゴッホの描いた「オーヴェールの教会」を初めて見た時のことが頭の中によみがえってきた。そして、ゴッホの描いたまさにその位置に立っていることに気づき、唖然とした。坂道を歩き始めると次々とゴッホの絵が浮かんでくる。この広がり風景、空間、空気等…さらに自殺した頃の「カラスのいる麦畑」、ゴッホ兄弟の墓と見学した。今思い出してみると、あの教会からの短い坂道は彼岸へとつながる道だったように感じられる。

高橋 平光
(利根山光人記念美術館専任研究員)